

なかったのだろうか。どうして私たちは誰も「気づかなかった」のだろうか。私は、この人びとの苦境を救うために立ち上がろうとヒューマニズムを掲げるような人間ではない。しかしながら地域研究をするものとして、知ろうとすること、あるいは発信することに対する責任は感じずにはいられない。最初に聞き取りをした患者の父親は私にこう尋ねた。

「それでお前は何かしてくれるのか。このまま立ち去るだけなのか。」

やはり、ただ立ち去るわけにはいかないだ

ろう。一日の聞き取りが終わって案内人の自宅に戻ると、彼の妻がご飯を用意してくれたことがあった。私と調査助手は顔を見合わせから、石鹸でいつも以上にごしごし手を洗い、おずおずと皿に手をのぼした。私も感染が怖かったのである。フィールドワーカーとして、私はどこまで人びとに関わることができるのだろうか。私に一体何ができるのか—乾季まっただなかの日差しのもとで、私ははっきりとした答えを見つけれないままにアチョリ・ランドをあとにした。

---

## ハウサの人びとの勤勉さ

—ニジェールの現地調査の経験から—

桐 越 仁 美\*

ニジェール共和国—西アフリカに位置するこの国は、国土の4分の3がサハラ砂漠に覆われた、いわゆる「砂の国」だ。しかし、すべてが砂というわけではない。南部は少ないながらも雨が降るサバンナで、トウジンビエ畑が広がる世界である。日本では普通に地面を覆っている黒い土壌は、ニジェールのサバンナには存在しない。中学生の頃から、日本では想像できない世界に憧れを抱き続け、私は2010年8月3日によく赤茶色のニジェールの大地を踏みしめた。

首都から南東に4時間、サバンナの中をまっすぐに伸びる幹線道路を車で走り抜けると、ドッソ州の都市ドゴンドゥチにたどり着く。「ドゴンドゥチ (=高い岩)」という地名のとおり、首都のニアメとは異なり、この周囲にはインゼルベルグが悠然とそびえ立っている。ドゴンドゥチからさらに南東に7kmほどのところに位置する農耕民ハウサのダンダグン村は、いつでも村びとの笑い声が響き渡る、私の大好きな村だ。

私はダンダグン村で合計4ヵ月間の調査の

---

\* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科

日々を過ごした。予備調査を終え、2011年8月に3度目の調査で村を訪れた際には、村の男性に手伝ってもらい、村の周りに生育する樹木を調査した。私はこの調査によって、ハウサの人びとのもつ樹形の認識と利用について知ることになり、それをテーマに研究を進めることになった。協力者のひとは樹木のハウサ語の名称とGPSで計測した緯度と経度、ひとは樹木の高さが一番下の枝までの高さ、ひとは胸高直径を私に伝えてくれる(写真1)。私は枝の本数を数え、みんなが伝えてくれる情報をノートに記載していった。

1日に200本の樹木を目標にして調査をこなしていく。この目標は思ったほど簡単なものではなかった。調査期間は8~9月で、雨季にあたる。雨季の気温は乾季に比べれば低いものの、日中の最高気温は40℃を超え、太陽光と砂による反射、湿度も合わせれば、体感温度は50℃に達するのではないかという暑さになる。暑いニジュールの調査地で、週休一日制という日程で樹木調査を続け



写真1 調査風景

樹木調査では胸高直径、樹高、GPSの担当を決めて作業を進めていく。

るのは、体力的にも、精神的にも大変な作業であった。大学時代に自転車部で鍛えた体力と根気だけが自慢の私も、「もう調査はつらい! 帰りたい!」と言って弱音をこぼすこともしばしばであった。それでもハウサの友人たちは、「ヒトミの調査のためなら」と、つらい調査に文句も言わずに付き合ってくれる。アフリカの中でも厳しい環境の中で生きる農耕民ハウサは、力強く、勤勉な人びとである。

しかし、私が彼らを勤勉だと素直に評価できるようになるまでには、いくばくかの時間が必要であった。ハウサという人たちは、良くも悪くもパワフルなのだ。とにかくおしゃべりが大好きで、毎日毎日、名前も知らないような人も含めて、数十人もの人びとが私の家を訪ねてくる。あいさつだけならいいが、葉をくれ、そのペンをくれ、服をくれ、自分の焼いた肉を買えという頼みごとがともなうことも少なくはなかった。一歩でも家の外に出れば、子どもたちは写真を撮ってもらおうと、「ヒトミ! フォト!」と言いながら、押し合いへしあいの大混乱になる。私の村の生活には、落ち着く暇も、場所もない。でも、私が彼らの要求を軽く受け流しても、彼らは怒ることはなかった。その様子は子どもから大人まで、ただただ自分という存在を私に記憶させようとしているようであった。しかし、今から考えると、私に自分たちのことを記憶させることも、彼らにとっては重要な要素となる。人脈づくりやおしゃべりによる情報収集は、ハウサの重視する人生の手掛かりであるビダ (*bida*) へとつながる。ダンダグ

ン村では毎晩いたるところから、楽しそうなおしゃべりの声が聞こえてくる。

そして、作物を少しでも多く生産しようとする彼らの熱意には目を見張るものがある。畑へのゴミの投入も、そのうちのひとつであり、畑に投入するゴミは家庭で出る食べ物の残りや家畜の糞に加えて、鍋や布、使い古したサンダルなども含まれる [大山 2007]。毎日、女性は薪の採集やバンバラ畑の農作業のついでに、ヤギやヒツジなどの小家畜を放牧する (写真 2)。子どもたちは畑での草を刈り集めて家畜に与える。家畜は殖え、その分、家畜の糞が屋敷地にたまる。家畜の糞や食べ物の残りをかき集めたゴミを、家族で協力して畑に少しずつ運んでいく。ゴミを置いたところには、砂が溜まり、シロアリが集まってきて、ゴミが分解され、いい土壌ができあがる。そこに生えたトウジンビエはゴミの栄養分を吸収し、とても立派な穂をつけるようになる。

ゴミの投入以外にもいろいろな工夫がみられる。樹木にまつわる工夫を知ったのは、樹木調査の最中だった。樹木を対象に調査をし

ようと決めたからには、この辺りの樹木の特徴を理解しなくてはならないと、ダンダグン村周辺に生育している樹木をかたっぱしから調べることにした。仲のいい 17 歳の男の子 2 人 (ジブリーナ、ラハマン) と 30 代の男性 2 人 (フセイン、ユスフ) に協力を依頼してローテーションを組み、毎日のように樹木調査に励んだ。男の子 2 人は「銃みたいだ!」とはしゃぎながら、樹高棒を担いで、調査場所の畑まで案内してくれた (写真 3)。最初は、「一体、ヒトミは何をしているんだ?」と、みたこともない道具を使って調査をする私たちを訝しげにみていた村びとたちも、一週間程度で私の仕事を理解し、「うちの畑にはいつ来るんだ?」などと誘ってくれるようになった。どうやら自分の畑に生育している樹木をみてほしいようだ。なぜ村びとは自分の畑の樹木をみてほしいなどというのだろうか。

ある日、畑の中に細くヒョロっとした小さな樹木をみつけた。通常であれば枝葉を茂らせる低木の樹木が、下の方の枝が剪定されてヒョロヒョロの状態になっている。その



写真 2 女性は畑仕事にヒツジを連れて来て、畑の周辺で放牧をする



写真 3 樹木調査に協力してくれたジブリーナ (左)、フセイン (中央)、ラハマン (右)

姿は、正直いってかなり頼りない。「この木は、枝が伐ってあるの？」と私がフセインに投げかけた質問をきっかけにして、私はハウサのもつ樹形の認識を知ることになった。ハウサの村びとは樹形をラブ (*rabu*)、バラウ (*barau*)、マタシ (*matashi*)、マヤンチ (*mayanchi*) の4種類に分類しているが、私がみつけたのはマタシと呼ばれる樹形であった。その近くには、伐られた枝葉が積み重ねられている。

フセインが口を開いた。「この畑はちゃんと手入れされているから、マタシがいっぱいあるんだ。ほら、あそこにもあるだろう？こうやって下の枝を切ると、木は上へ上へと伸びるんだ。それにサバクバッタの住処にもなくなる。枝葉は畑の栄養になるし、マタシは風からトウジンビエと砂を守ってくれるんだ。」よくみると、たしかにこの畑ではどの樹木も剪定されている。そして、枝葉は地力の落ちたところにきちんと積み重ねられている。剪定された樹木の本数はかなりのもので、多い畑では数百本にもものぼった。ハウサは、自分の畑の中のすべての樹木の位置とその枝葉の状態を把握したうえで、それらすべてを管理の対象としている。村びとが自分の畑の樹木調査をしてほしいというのは、自分の畑での仕事ぶりと樹木の管理状態をみてほしいということなのだ。

最近では化学肥料の購入と利用がみられるようになり、お金持ちの畑では化学肥料の力でトウジンビエが高さ3m程度にまで生長している。しかし、その隣の化学肥料を確保できない村びとの畑に生育するトウジンビエ

は、悲しいほどに小さかった。こういう畑では、マタシを作り、枝葉を地力の落ちた場所に置き、ゴミを投入して、どうにかしてトウジンビエの収穫量を上げなければならない。何らかの工夫を施さなければ、トウジンビエは大きく生長することはない。小さなトウジンビエの株間にみえる樹木は、どれもきれいに剪定されている。炎天下、畑の奥の方では、畑の持ち主である男性が小さな樹木を1本ずつ丁寧に剪定している。家にはたくさん子どもたちが待っている。どうにかして、トウジンビエの収穫量を向上させなければならない。

「人も物も停滞してはならない。畑の手入れも出稼ぎも一生懸命にやるんだ。その努力はアラーがみている。いつか絶対に実るんだよ。だから今、ヒトミが頑張っているのもアラーがみている。きっと良い成果が出るよ。」食べ物に困っている彼らを応援したくて調査に来たはずなのに、逆に彼らの励ましを受けて調査に取り組んできた。彼らの明るくて力強い言葉に背中を押され、1ヵ月で約4,500本の樹木の調査を終えることができた。当初の目標には達しなかったが、ひとまず、充実感にひたることができた。

樹木調査をとおして、私は彼らの樹木の認識とトウジンビエの収穫量を向上させるための熱意を垣間みた。そして、この時ようやく彼らの真の勤勉さと人生に対する姿勢をみたのだ。彼らの行動のすべてを見返し、納得した。ハウサは、草木、家畜、村でのおしゃべり、生ゴミや使い古したサンダルにまで、自

分たちの未来の可能性をかけている。彼らにとって、身の回りのすべてのものが、自分と家族が生きていく未来への貴重な資源となる可能性をもっているのである。

「ヒトミも、ハウサのやり方がちょっと分かかってきたみたいだね。」樹形についてのひと通りの説明を終えて、フセインはニカッと笑う。私とフセインが話している間に、太陽は足早にサバンナの地平線に沈もうとしていた。真っ赤な夕日を受けて、17歳の2人が

そそくさと調査道具を片付けて家路につく。村では今夜も、未来への資源となるであろう「おしゃべり」が私たちを待っているのである。

#### 引用文献

大山修一. 2007. 「ニジェール共和国における都市の生ゴミを利用した砂漠化防止対策と人間の安全保障—現地調査にもとづく地域貢献への模索」『アフリカ研究』71: 85-99.

---

## 高速鉄道建設が中国貴州省の農村に与えた影響について

佐藤若菜\*

筆者は、2009年3月からおよそ2年間、中国西南部に位置する貴州省でフィールドワークを行なった。そのうち約1年間は貴州省東南部の農村に滞在し、中国の少数民族であるミャオ族の刺繍技術について調査を行なった。

調査村での暮らしにも慣れ始めた2010年5月初旬、村ではある噂が流れ始めた。「数ヵ月後に高速鉄道の建設が始まる」というのである。その後、高速鉄道に関する話は、村のいたる所で聞かれるようになった。数ヵ月後、村の水田の一部は埋め立てられ、そこには50名ほどの農民工<sup>1)</sup>が寝泊まりする2階



写真1 鉄道部の事務所と農民工の宿舎

建ての大きな宿舎と鉄道部<sup>2)</sup>の事務所が建ち、大規模な建設工事が始まった。ここでは、噂が流れ始めた2010年5月から筆者が

---

\* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科

1) 農村部に戸籍をもちながら、主に都市部に移動して働く人々の呼称。

2) 鉄道事業を管轄する行政部門。